

---

# オーシャンブルー

沙也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーシャンブルー

### 【Nコード】

N9257C

### 【作者名】

沙也

### 【あらすじ】

ある朝、下宿のごみ捨て場でひとりの訳あり青年が発見される。彼に巻き込まれて、下宿人たちの日常は大きく変わっていくことになる。

## プロローグ―出会い―

思えば、出会いは結構強烈だった。たぶんこれから先、何があっても忘れないだろうってくらいには衝撃的だった。

あの人が覚えているかどうかは分からないけど、きっとこのことには意味があつたんだと思う。

覚えてる？ あの日の青を。

夏が終わりを告げようとしている。寝苦しかった夜も、今は適度に心地よく、つい日が昇ってから布団の中から抜け出せなくなっている。そんな、寝坊しがちな季節のある日。

「―やばい、遅刻っ！」

日本の歴史を物語り、かつ多くの学生が学ぶ京都のある下宿で、毎朝お決まりの悲鳴が上がった。いつものごとく睡魔に負けた哀れな学生がここにひとり。

名前を岡田真琴。R大学一回生、花の十代最後の年を謳歌している最中、のほほである。

「なんや、お前また寝坊かいな」

下宿の薄い壁を筒抜けで聞こえた叫び声に、隣人の土屋彰あきひが眠そうなお顔をこすりながら、部屋のドアを半分開けて廊下に出した。

「一限目が語学なの忘れてたんです！ 大講義なら出席取られなかったのに」

「いや、大講義もちゃんと出ようや」

「先輩だつて出てなかったくせに」

「俺は賢いからええねん。ほら、しゃべってる時間あつたらはよ行きや」

「ほんとだ。じゃ、いつてきます！」

今年四回生の土屋は、三回生までに単位を取りだめしたとかで、ほとんど大学に行く必要はなくなっていた。また部屋に戻って二度寝をするのだらう彼を羨みつつ、真琴は下宿を飛び出し、大学に向かって走り出した。が、

「…え？」

思わずブレーキをかけてしまった。何かがおかしい。

ちょうど下宿のごみ捨て場の前を通り過ぎた時だ。今日は月に二回の粗大ごみの日で、カバーが破れて見るも無残な姿のソファが捨てられているのだが、おかしいのはその上に『ある』ものだ。

真琴は全速力で下宿へ引き返し、土屋の部屋のドアを叩いた。少しして、再び眠そうな土屋が顔を出す。

「…何やねん。忘れものか？」

「違います！」

「じゃあ何や。俺の眠りを妨げよって…」

真琴はごくりと息を飲んで、口をぱくぱくさせながら、

「ごみ捨て場に、人が…」

「はあ？」

と、目も半開きの土屋に、怒鳴るように訴えた。

「だから、ごみ捨て場のソファに人が寝てるんです！」

「…ほんまやな」

その、ソファで熟睡する男の姿を見とめた土屋の第一声は、かなり気の抜けたものだった。起きぬけの土屋を強引に引っ張ってきた真琴は、彼の後ろに隠れながら様子をうかがっている。近所の酔っ払いが寝ているだけの話かと思えば、服装や見た目の年齢からしてそれはなさそうだった。

まだ若い、真琴と同じか少し上なくらいだろう。細めの身体を丸めて、気持ちよさげに眠っている。もう朝も九時で日も高いのだから、嫌でも目が覚める明るさなのだが、よほど眠りは深いと見える。

「で？ 俺らはこれをどうすんねん」

「どうって…先輩が何とかしてください」

「お前が勝手に俺を連れてきたんやろ！？ 責任持ってお前が何とかせえよ」

「ええ！ 無理、無理ですっ！ こんな誰か分からないような人…」  
「そいつを俺に押しつけるんか、お前は！ ええ根性しとるやないか」

「ここは先輩として頑張るところでしょう？ か弱い後輩に危険な真似させないでください よ」

「こついう時だけ後輩ぶりよって…」

二人が埒のあかない口論をしていると、おもむろにソファの上の男が身体を起こした。それに気づかず言い合いを続ける二人に、

「あの…」

と、控えめな声かけられる。

「何や」

いたって普通に応えた土屋は、次の瞬間固まった。真琴も連鎖反応のように固まる。

ソファに座ってこちらを見る男は、存外整った顔立ちをしており、何となく見つめてしまった。男はやはり若く、おそらくまだ大学生だろう。否、こんな場所で寝ているのだから、節度ある学生ではないかもしれない。

「ここって京都のどの辺ですか」

その質問が、男をさらに、自分の居場所も分からない人間という得体の知れなさで包む。しばらく黙って、そのうちに土屋が、

「北区やけど。あんたはどっから来たん？」

と、持ち前の社交性で挑んだ。

男は何かを考えるように遠くを眺め、やがて肩をすくめた。

「言わなきゃ駄目ですか」

「おちよくってんのか、おい。…まあええわ。べつに俺らには関係ないことや。」

―で、あんたはこんなとこで何してんのや。そのソファはベッドとちゃうで」

ぼりぼりと頭をかいて、男は飄々として答える。

「いいところにソファがあると思って寝てたんですけど…」

「いまいち答えになってへんなあ。じゃ、ここへ何しに来たん？」

この近所に用事でもあつたんか」

「質問攻めですね」

「当たり前やろ！ 自分の下宿のごみ捨て場で寝られたら、気味悪くてしゃあないわ！

おい、お前も何とか言い」

いきなり土屋に話をふられた真琴は、はつとして必死に言葉を模索した。初対面の男に話しかけるのはいささか気が引けるのだが、土屋がしきりに促すので、

「あの…荷物は？ 財布とか携帯とか持っていないんですか」

と、素朴な疑問から入ってしまった。すると男は、思い立ったようにズボンのポケットを探り始めた。皺くちやに折りたたまれた五千円札一枚と小銭が数枚出てきただけだった。

「何や、携帯持ってへんのか」

「家に置いてきたから」

「…したら早く帰れや。家があんのなら、いつまでもぼーっとしたらんとさつさと帰れや」

いらいらした様子の土屋に、真琴は内心ハラハラしていたが、

「家に帰りたくないからこんなところにいるんです」

という男の言葉に、二人は顔を見合わせた。

まさか、家出青年がごみ置き場のソファで寝ているとは。いい大人になって、頼るあてもないのだろうか。

「あなたな、いい歳してなに家出や言うてんの。そんなん通用するんは中学生までや。」

あほなこと言わんと、とりあえずいつぺん家帰り」

「帰れませんよ。帰ったら俺の人生、今日で終わりです」

「んな大袈裟な…」

「信じてもらえなくても本当ですよ。殺されるんじゃないかな、俺」

さらりと言う男に、さすがの土屋も閉口してしまった。このまま膠着状態が続くのも精神的によろしくはないと判断し、真琴は気をきかせたつもりで言った。

「あの…なんだったら中でお茶でも…」

土屋から激しいツッコミを喰らったのは言うまでもない。

あの日、真琴たちの下宿、日和荘のごみ捨て場で発見された男は、土屋の部屋でお茶を飲んでいるうちにどういうわけか、彼と意気投合してしまった。

「そうやなあ、人生大変なこと色々あるよなあ。分かる分かる」

何と言いくるめられたのか、土屋自身覚えていないらしいが、男

はうまく土屋に取り入って、翌日には日和荘の空いた部屋に下宿することが決定していた。携帯以外の荷物は、ＪＲの駅のコインロッカーに預けてあったようで、大家である初老の女性が趣味で貸しているような部屋なので、契約はあっさり済み、気づいたら彼は日和荘の住民としてそこにいた。

ちよつと顔がいいからと絆されてはいたものの、きちんと自分の家がある家出青年が、今まで来たことのないような場所で新しく下宿するなんて、どう考えてもおかしい。現実的でない。何か事情があるにしても、普通ではない、と真琴が土屋に話しても、

「べつにええんちゃう。あいつにはあいつの生き方があんねんで」

と、完全に男に流されていた。

男は結局家出したとの理由しか口にせず、身の上の話もまったくと言っていいほどしない。日和荘に住んでいても平日の昼間はほとんど部屋にいなかったりと、行動自体が謎に包まれており、怪しいことこの上なかった。

けれど、そんな怪しい男、永澤圭が真琴の隣人になつてから、もうすぐ一ヶ月がたとうとしていた。



## 第1話

日和荘。全室南向き、R大学から徒歩十分で家賃ひと月三万円という優良物件だが、風呂なし、木造築三十年、壁は板一枚、というきわめてプライバシーの守られない場所でもあった。

共用の廊下と玄関はしばし住人の談話スペースと化し、会話の内容もほぼ室内まで丸聞こえのため、結局下宿に居合わせたメンバーが全員参加での談話へと発展する。しばらくした後きりがついてそれぞれの部屋へ戻るか、そのまま誰かの部屋へなだれ込み、飲み交わしながらさらに会話が深まるかはその日の雰囲気しだいであった。日和荘は住人の入れ替わりがさほど激しくはなく、下宿人同士の仲もいい。毎週月曜日の夜には大家から夕食がふるまわれ、食事をしながらの会話はさながら家族のようだ。下宿人たちの部屋は二階にあり、一階は大家自宅であるが、その一室が下宿人にも開放されており、夕食会はそこで開かれる。どこまでも好意的な女性であった。

今日は月曜日、恒例の夕食会の献立はこの季節、そろそろ恋しくなってきた鍋である。

食卓を囲んでいるのは、真琴と土屋、真琴の正面に座るR大学O Bで社会人二年目の南達也。彼は学生時代から日和荘に下宿しており、社会人になってからも、変わらず住人であり続けている。下宿人のなかで最年長であり、社会人として大人の風格が漂う彼は実際面倒見もよく、信頼に足る人物であった。

そしてその南の右隣に座っているのが、R大学一回生の安藤剛。

「南さん、今日は会社はよ上がったんやね。最近いつつも午前様やっただやん」

「月曜はまだ仕事がたまってないからな。明日からはまた残業だよ」

「お疲れです。いややなあ、社会人なりたないわ」

「土屋先輩つてもう就職決まったんですっけ？」

「決まってるんで。南さんみたいに大手とはいかんけど、それなりのところにな。人生最大の快挙や」

「じゃ、初任給で何か奢ってくださいね」

「あほ。何で男のお前に金使わなあかんのや。俺のおサイフは女性のためだけに開かれてんの」

土屋が安藤の頭を小突いた。

安藤はその童顔とまるで中学生ような生意気さから、先輩から弟のように可愛がられる存在である。真琴も同学年のよしみで時々勉強や食事の世話をしていた。その安藤が、

「——あれ、そっぴや永澤さんは？ 確かさつき部屋にいましたよね？」

と、二階を見上げて言った。

一ヶ月前、唐突に日和荘にやって来た男、永澤圭。先週の月曜は彼も夕食会に参加していた。

「そっぴだな。寝てるんじゃないか。起きてるなら、ここに来てるだらうし」

「真琴、起こしてきたってくれるか」

土屋の言葉に、真琴は一瞬固まった。

「な、何で私が。先輩が行けばいいじゃないですか」

「お前、先輩を走らせる気か。ええやん、呼び鈴鳴らしてきたらいいだけやし。それで返事なかったら放置や、放置」

「はあ……」

正直、真琴は永澤圭が苦手だった。隣の部屋で生活していても、顔を合わせたことは数えるほどしかなかったし、ろくに会話をしたことがなかった。ましてや二人きりという状況は考えられない、というくらいにお互い疎遠だった。

「岡ちゃん、ちょっと敬遠しすぎなんじゃない？」

安藤が口を尖らせて言う。

「そ、そんなことない。行けばいいんでしょ、行けば」

ここで妙な疑いを持たれるのもおかしい話なので、真琴はさっと席を立った。いったん建物の中から出て、外に設置されている錆びた階段を昇り、こちらも年季の入った引き戸を勢いよく引いた。

永澤の部屋は共用玄関を入れて右側の三番目のドアだ。その前に立ち尽くして、真琴は小さくため息をついた。

（何でこんなに緊張しなきゃいけないのよ——？　そもそも永澤圭の『第一発見者』って私よね？　普通ならもっと仲良くなってもいいはずよね？　大体あの男が無愛想っていうか、無口っていうか

——）

一人で悶々としてしていると、不意に背後から手が伸びてきて、呼び鈴のボタンを押した。後ろを振り返ると、呆れた様子の安藤が立っていた。

「あ、剛……」

「何やってんだよ。岡ちゃん、ちつとも来ないからさ」

「ごめん。……っていうか、今返事あった？」

耳をそばだててみても、部屋の中で何か動いた気配はない。

「熟睡してんのかな」

呟いた安藤は、涼しい顔でボタンを連打した。呼び鈴が鳴り響いているのが、外まで聞こえてくる。

「ちよっ…何やってんの」

「土屋先輩がこれくらいやっててもいいって言っから。…よし、これでそのうち起きてくるでしょ。下、戻ろうか」

安藤がさっさと踵を返したところで、部屋の中から何かが落ちるような音と、何かが崩れるような音と、何かが散らばるような音がした。

思わず顔を見合わせた真琴と安藤は、そろってドアへと視線を移した。

「大丈夫かな…？」

「さあ…？ 部屋の中、大変なことになってそうだけど」

二人でなぜか声をひそめていると、部屋のドアがゆっくりと開いた。

「誰…？」

眠そうな顔で姿を見せた永澤圭が、前髪を掻き上げながら言う。呼び鈴を散々鳴らした手前、明らかに不機嫌な永澤を見れば、かなり気まずい。

「あ、あの…今日はみんなで晩飯食べる日なんで…」

安藤が彼の顔色を窺うようにして話す。  
すると永澤は、意外にもあっさり答えた。

「ああ…すぐ行く」

永澤はジーンズに白いシャツというラフな格好で、自分の服装を確かめるように見下ろした後、そのまま部屋を出てきた。ドアが閉まる直前、隙間から部屋の中をちらりと覗いた真琴は、絶句した。

あれは何だ——？

真琴が怪訝な目つきで永澤を見やると、彼はふっと笑って先を歩いていってしまった。

（何なのよ、あの男——！？）

謎が謎を呼ぶ男、永澤圭。彼についてひとつ、判明した事実。  
彼の部屋には、ジャングルと見紛う未知の領域が広がっている。  
つまり、死ぬほど汚い。

## 第2話

土屋と南が待つ食卓へ戻ると、二人はすでに乾杯をすませていて、鍋の具材もちょうどいい具合に煮えていた。

「お前ら遅い。お先、いただいてんで」

ビールのグラスを仰いだ土屋が、片手の箸をかちかちと鳴らした。真琴と安藤は元いた席に着き、永澤は緩慢な動作で土屋の左隣に腰を下ろした。真琴からは土屋という壁を通してしか視界に入らなくなつたが、やや猫背気味の背中が小さく伸びをするのを何となく眺めてしまった。

「おい、圭。お前も飲め」

土屋がビールの缶を持って、永澤にグラスを出すように促す。差し出したグラスになみなみとビールが注がれると、永澤は「いただきます」と呟くように言ってからグラスに口をつけた。

まだ未成年の真琴と安藤は、普段はいい加減なくせにこの時ばかりは真面目な顔をする土屋に、飲酒は止められていた。というのも、彼が大学一回生の時、同級の友人を急性アルコール中毒で亡くしたためらしい。

『酒は薬にもなるけど、毒にもなる。うちゅーわけで、酒飲むんはその辺の判断ができる大人になってからにしいや。若いうちから飲み癖つけても、いいことあらへんで』

土屋が自分たちのことを思ってくれているのが分かったので、真琴はその言葉に従っていた。安藤もサークルの付き合いで飲みに行

くことが多いようだが、酔い潰れて帰ってきたことは一度もなかった。

まだ食べ盛りの男子が四人もいるので、鍋の減り具合はなかなか早く、真琴も集中していないとあつという間に食いつぶされることになってしまふ。自分の食べる分をしっかりと確保しつつ、向かいに座る南と言葉を交わす。

「南さんって具体的に何の仕事してるんです？」

「うちはコンサルティングの会社だけど、俺は今のところ経理担当だから、ひたすら数字とにらめっこだよ」

「南さん、経済系のゼミだったなら、得意分野じゃないんですか」

「それはあんまり関係ないかなあ。ついこの前まで会議にかける書類を上げるので、死ぬかと思ったよ」

「毎日ヨレヨレになって帰ってきてましたもんね」

「ほんとだよ。あー来年までには経理から外れたい…」

頭を抱える南に、真琴は苦笑する。こうして大学のOBで、社会に出て働く人物から直接話が聞けるのはとても貴重なことだと思う。土屋が熱心に南と仕事についての話をしているのを、最近よく見る気がする。彼らは真琴と安藤が日和荘にやって来る前からの住人で、年の差など感じさせないくらいに仲がよかった。お互い暇があれば飲みに行ったり、時にはパチンコまで行くらしい。

「岡田は？ やっぱりそのまま日本語教師目指すのか」

南の言葉に、真琴は小さく頷いた。真琴は大学では文学部に所属しているが、日本語教師の免許を取るために、学内にある言語研修センターで週に二回特別授業を受けていた。この職業を志したことに特段の理由はないが、大学に入学した頃から漠然と興味を持ち始め、それが今も続いているといった形だ。

よき先輩に話を聞いてもらおうと真琴が口を開きかけると、

「ええー！？ 圭、おま、ちょ、もっいっぺん言ってくれへん？」

いきなり隣で土屋が叫び声を上げた。

「どうしたんだ？」

南が尋ねると、土屋が失礼にも永澤を箸で指して言う。

「いや、こいつが現役のK大医学部生や言うから……」

「は？ 本当なのか」

南が呆氣に取られた顔をして、永澤を見る。彼は黙ってジーンズの尻ポケットから財布を取り出し、中から学生証らしきカードを出して見せた。

「ホンモノや…お前、この学生証、偽造しとんのとちゃうやろな」  
「そんな無意味なことしてどうするんだ」

そう言って永澤は学生証を仕舞う。

（——あのジャングルのような部屋に住むこの男が、K大医学部？）

真琴はもちろん、その場にいた永澤以外の人間がしばし固まった。

「けどお前、医学部やったら、こんなところにある場合とちゃうやろ。四回生や言うから、もう単位も取り尽くしてんのかと思ったけど。最近大学行ってるのか」

「…行けるものなら行ってる」

永澤が新しいビールの缶を開けた。

「何か行けない理由でもあるんですか？」

真琴が何気なく訊くと、永澤はしばらく黙ってから、

「そのうち話すことになると思う」

とだけ呟いた。

鍋を囲んでの談笑はなかなか終わりを見せず、酒が入って陽気になった土屋と南を中心に盛り上がっていると、すぐ外で急ブレーキで車が停車する音がして、少し間を置いて女性のヒールの靴音が近づいてきた。夜も十時を回った頃で、大学近くの閑静な住宅街には似つかわしくない騒音に、全員が顔を見合わせた。

「誰かお客さんかな？」

安藤が言うと、煙草の火を消した土屋が、

「えらい非常識そうな感じやけどなあ……」

と最後の煙を吐き出した。

するとおもむろに立ち上がった永澤が、テーブルの食器を片づけ始めた。

「悪いんだけど、ここに俺がいたこと黙っててくれないか。たぶん、気の強そうな女の人来るだろうから」

「はい？」

四人ともが首を傾げたところに、玄関先でチャイムが鳴った。大  
家の女性が訝しげにそちらへ向かうのを見送って、永澤は何かを警  
戒するように、隣の部屋へ姿を消した。

「何や、分かれた彼女が追っかけてきたとかか？」

「ええー修羅場ですか」

「何にせよ、追われてるらしいな」

「そっぴゃあいつ、前に、家に帰れへんとか言いよった気がするわ」

「初めてここに来た日に言っていました！ 何かまずい事情でもある  
んですかね」

「俺たち、巻き込まれちゃうわけ？」

額を集めて好き勝手なことを言い合っていると、擦りガラス入り  
の引き戸を開いて、スーツ姿の女性が現れた。永澤の言ったとおり、  
気の強そうな美人だった。年齢は二十代後半、といったところか。  
ずいぶんと威圧的なオーラを発している。

「…こんばんはー」

気の抜けた土屋の挨拶を切り捨てるように、女性は口を開く。

「永澤圭はどこ？ さっきまでここにいたでしょ」

さすがに誰も答えない。何となくアイコンタクトを取りながら、  
ごまかしきれものかどうか、策を巡らせているようだ。

「訊いてるんだけど。永澤圭は——」

「いましたよ」

口を開いたのはやはり一番口の立つ土屋だった。

「さっきまではいました。ただ、今はいません。今日はもう帰って  
こんと思いますわ」

「本当に？」

「ええ。残念ながら行き先は知りません。秘密主義な奴なもんで」

「そうね。それで？」

「お引取りいただけませんか？ 僕らもせっかく盛り上がってたんで」

女性は顔色ひとつ変えずに、返事をする。簡潔で不機嫌丸出しの  
土屋の言葉でも、太刀打ちできそうにはなかった。

「お楽しみだったところ申し訳ないんだけど、帰るわけにはいかな  
いのよね。あの子に大事な用事があるから」

「僕が伝えときますよ？」

「企業秘密だから、貴方たちには教えられないの。——ちょっと、  
圭！ 聞こえてるんでしょ。べつに今日はあんたを連れ戻しに来た  
わけじゃないわ。説得しに来ただけよ」

女が辺りを見回し、声を張り上げて言う。

「ここで出てこないなら、今度はあんたのこの社員を連れてくる  
わ。どういつつもりでここにいるのかは知らないけど、この人たち  
に迷惑はかけたくないでしょ？」

しばらくの沈黙があった後、永澤が逃げ込んだのとは反対側の戸、  
つまり女が入ってきた方から物音がし、全員がそちらを振り返ると、  
そこに腕組みした永澤が立っていた。ひどく慥然とした表情をして  
いる。

「ほら、やっぱりいたんじゃない」

女が得意げな顔をする後ろで、土屋が「なんや、俺ら完全にダシに使われたやん」とこぼす。

柱にもたれて押し黙ったままの永澤に、女はゆつくりと詰め寄り、

「何の説得に来たかの説明はいらないでしょ？ あんたがいなくなつてから、こっちは困ってるどころの騒ぎじゃないんだから。さつさと帰ってきなさいよ」

「その気があるならとくに帰ってるよ」

「じゃあいつまでもこんなところに居座るつもり？ あんた最近大学にも行つてないんですって？ おかげで探し出すのにだいぶ時間がかかったわ」

「当たり前だろ、見つからないようにしてたんだから」

「そんなにあの家が嫌なの？ あんたがいないと、みんなが困るのよ」

終わりの見えない上に、話しも見えない二人の口論が続くなかで、

「あのう……」

と割って入る声があった。声の主はもちろん、土屋だ。

「何よ」

女が低いトーンでぶっきらぼうに言う。

「……いや、話がまったく見えへんのやけど。おたくら、何の喧嘩をしてるわけ？ 俺らも完全な部外者やないし、話してもらえんやろ

か、圭」

「貴方たちは知らなくていいことよ。外で話しましょ——」

女が出て行こうとするのを、永澤が引きとめる。

「この人たちには話しておきたい。たいした話でもないし、構わないだろ」

「…いいわけ？ ややこしいことになるかもしれないわよ」

「姉さんさえよければ、俺は問題ないよ」

「『姉さん！？』」「『』」

四人が女を指差して叫んだのは、言うまでもない。

### 第3話

——その日の圭は、ゼミの教授の出張で大学へ行く用がなくなつたので、自宅で本を読んでいた。同じくリビングでは久しぶりに休暇を取ったという姉の雪がテレビを見ながらくつろぎ、母親が三人分のコーヒーを用意しているところだった。

「ねえ、母さん。まだ父さんから何の連絡もないの？」

キッチンにいる母に雪が問いかけ、彼女はカップを並べながら首を傾げた。

「そやねえ。もうひと月もたつんに、何してはるんやろか。会社には連絡ないん？」

生粋の京都人である母は、穏やかに話す。ただ圭と雪は京都で暮らし始めてお互いに日が浅いため、京都弁が口から出ることはない。父親も、この京都にある自宅で過ごした時間はきわめて短かった。

「もちろんないわ。圭、あんた何か知らない？」

「知らない。大体俺に親父との連絡手段があるかよ」

「あるじゃない、あんたの会社で——」

雪が言い終わらないうちに、玄関先でチャイムが鳴った。が、母が対応する前にドアが開いて、数人が上がり込んでくる物音がした。思わず圭と雪が立ち上がったところに、

「永澤副社長——」

という泣き声にも似た叫びとともに、スーツ姿の男たちがなだれ込んできた。父親が社長を務める会社の社員、それも専務を始めとする経営管理職クラスの人間たちだ。雪は二十七歳という若さで、この副社長の地位にあった。

「いったい何事よ？ 急に自宅に上がってこないで！」

雪が怒鳴りつけると、専務がうなだれたままに言う。

「社長が…永澤社長が…」

「社長がどうしたって言うのよ？」

専務の顔を覗き込み、雪が尋ねる。彼は声を振り絞るようにして、言った。

「——アフリカ奥地で、消息を絶たれました…」

「…というわけなんだけど」

新たに六人で取り囲んだテーブルで、雪が説明を切った。雪と圭を除く四人はぽかんとして、「全ッ然分からへんわ」という土屋の言葉に大きく頷いた。

「あんたらの親父さんの失踪と、圭の家出に何の関係があんのや」「知らないわよ。だってこの半月後に圭が出てったのよ」

雪が睨んだ先で、圭は悠々と煙草を吸っている。

「でも、それでよく永澤さんがここにいて分かったね。普通だったら、お父さんを捜してアフリカまで行ったとか考えるのに」

真琴が言つと、雪はかぶりを振って小さく笑った。

「ないない。こいつはそんなことするような奴じゃないわ。まあ一応外務省には問い合わせたけど、案の定引っかからなかったし」

「じゃあ、永澤さんはどうして家出なんか？」

真琴の言葉に、全員の視線が圭に集中した。圭は煙草を灰皿に押しつけて、深く息を吐いた。

「俺はまともな、ごく普通の大学生なんだ。研究に専念して、医者になるために勉強したいんだ。間違っても会社の経営に引っ張り込まれることなんか望んでない」

「何よそれ。あんたまさか、あの会議から逃げるために…？」

「言っただろ、俺は会社の経営なんかに興味はないって」

「何言つてんのよ。あんた既に片足突っ込んでるじゃない。あれだけウチの利益に貢献したんだから、こっちだって今更あんたを頼らないわけにはいかないわ」

再び二人での言い合いが始まり、話についていけなくなった面々は顔を見合わせた。

「ちょい待ち！ また話が見えへんようになってんで。会社の経営に巻き込まれるっていうんは、どういう意味や」

土屋がストップをかけ、やっと姉弟の会話が止まる。説明するのが面倒くさいといった様子の圭は、雪に目で促した。

「圭はこれでも大学出てるのよ。経済学部を」

「は？ 今K大の医学部生なんじゃ…？」

「だから、アメリカで一回卒業してるのよ。ハーバードの経済専攻を」

「…「はあゝ！？」」「…」

四人同時に叫び、その後固まった。言葉をなくす、とはまさにこのことだ。

雪と圭は困ったような呆れたような顔をして、四人がまともに動き出すのを待っていた。

「いや、圭。お前…てか、はあゝ！？ 何やねん、お前！ そういうことはもっと早くに言えや！」

驚きを隠せない土屋は、圭に詰め寄った。圭はため息をついて、

「こういうことになると思ったから言わなかったんだ。俺がK大生だって言っただけでもあんな反応だったんだから」

「当たり前や！ じゃあ何か？ 圭はほぼ経済のプロやと…？」

「そ。四年前、圭が日本に帰国したくらいから、経営とか株取引に関してアドバイスもらってたのよ」

「で、親父さんなき今、圭の力が必要や、と」

「分かってくれた？ で、圭はそれが嫌で家を出たって言ってるわけ」

「…何でなん？」

土屋が圭の方を向いて尋ねると、彼は新しい煙草に火を点けて言った。

「四六時中べったり張りつかれて、会社の利益と株価と企業競争と接待云々の話をされてみる。会社のトップ連中が気にかかることなんて、ほとんどが金と私欲にまみれてる。俺はそんな連中の手助けをするつもりはない」

そこで雪がテーブルに手をついて立ち上がった。

「待ちなさいよ。私の部下を侮辱するつもり？ みんな、社長を信頼しきって会社のことを一番に考えてるわ」

食ってかかる雪に、圭は片手を上げて制した。

「それとこれとは話が別だ。いくら社長を信頼して、会社に従順でも彼らにだって欲くらいある。金が欲しいし、地位だって守りたい。俺はそういう部分には関わりたくないっていう話だよ」

「圭……」

「俺が家を出るまでの半月、大学内にまで付き纏われたからな。正直うんざりだった」

「そんなこと……私に言ってくればよかったじゃない」

「副社長には内密につて頼まれたんだよ。——だから後で責めてやるなよ。社長の欠けた会社のために必死だっていうのは、俺にも分かってる」

圭の話に、雪の気迫も衰えている。大方事情の掴めた四人も含め、部屋全体がしんとした空気に包まれた。

ここで中断してしまった話を仕切り直すのは、この男だった。

「——で？ 結局どうすんの？ 圭は家に戻るんか？」

土屋の問いに、圭は「いや」と小さく答える。雪も自分の部下た

ちの行動に思うところがあるのだろう、反論はしなかった。が、しかし、すぐに思い出したように声を上げた。

「ちょっと待って！ あんたが家に戻りたくないのは分かったわ。けど、あんたの会社はどうすんのよ？ 社員はうちに居候したままなのよ！」

「…まだ別に事情があるんかい」

土屋が口を挟もうとしたところで、外で車のブレーキ音とドアの開閉音がした。そして、数人分の足音が確実にこちらへ向かっていった。土屋たちは今までの話の流れから、警戒するのも面倒になっており、

「また新手の追っ手かい。圭は人気者やなあ」

などと悠長に構えている。

果たして、深夜も十二時を回った時刻に、非常識にも他人の家に無断で押しかけてきたのは、長身で体格のよい黒人だった。

「——何や、えらい本格的な追っ手やな」

悠長さが一気に消し飛んだ。

## 第4話

突然現れて立ちほだかる黒人の男に、四人は確実に腰が引けていた。真琴と安藤は土屋の袖口を掴み、土屋は土屋で南に視線を送っている。

ふと、圭のため息が聞こえた。こめかみを押さえるようにして、呟いた。

「アレックス——何しに来たんだ……？」

すると男はとたんに破顔し、圭に近寄るとそのまま抱き締めた。

「捜しましたヨー社長——！」

よく見れば男のほかにも三人おり、全員が日本人離れた顔立ちをしていた。それが圭に詰めかけて抱きついている。

土屋は考えるより先に、口に出していた。

「あのう……説明してもらっていいかな？」

「俺の親父は若い時から世界中を旅して回ってて、行く先々で知り合いをつくって……多分世界で知り合いがない国はないってくらい。それで、たまに気に入った奴がいると日本に連れて帰ってくるんだよ。ここに居る三人もそうなんだけど。一人や二人ならウチで世話してやれたけど、さすがに十人超えた時に姉さんがキレて……五年前、親父が彼らがちゃんと働いて収入を得られるように会社をつくったんだ。家の裏にプレハブ小屋建てて、そこを事務所にしてやつ

てただけど、親父も一応会社：東興物産の社長だから忙しくて――

「圭社長が二ホンに戻ってきたら、会社の名義を書き換えやがったんデス。よね？」

アレックスが楽しそうに説明に加わる。『名義を書き換えやがった』は確実にどこかで聞いた圭の言葉をそのまま真似たものだろう。

「じゃあつまり、その親父さんがつくった会社の社長はお前ってことか？」

黙りっぱなしだった南がようやく口を開いた。

「そうだ。今回の件に関して、こいつらなら、俺がいなくてもやっていけると思っただけど……駄目らしい」

「何の会社なんだ？ 社員が外国人ばかりとなれば、仕事も限られてくるだろう？」

「外国人に仕事を斡旋するんだよ。東興物産の系列企業からその提携先まで、片っ端から頼み込んで受け入れ先を見つける。もちろん企業側からの要請で、人材を派遣することもある。やっぱり、こればかりは伝手を頼りに、俺が中心になってやるしかないんだけどな」

「ああーッ！」

いきなり土屋が叫び声を上げた。

「東興物産でお前……俺の内定先、その系列やねんけど。で、圭はその社長の息子……？」

「それは奇遇な話だな、土屋」

南は面白そうに笑うが、土屋は呆然として頭を抱えている。東興

物産といえば、日本国内ではその名を知らぬ者はないとも言える一大企業グループである。その社長となれば、社員にとってまさに雲の上の存在だ。

「本社の社長で…やばいんちゃうの？ てか失踪したんやろ？ それって結構大事なこと違うん？」

「ああ、でもまあ親父にはよくあることだし、搜索メンバーは手配してあるから今は気に病んでも仕方ない。社長一人が行方不明になったからって影響を受けるような企業じゃないよ」

こんな状況には馴れっこという様子の圭が言う。世界中を旅して回っていたのは伊達ではないのだろう。

「えってか待つて！ お前の姉貴が副社長で言つたよな？ は？」

副社長がこんな女王様みたいな――」

「何ですって？」

土屋の言葉にすかさず雪が睨みを効かせる。

「せやかて俺らダシにして圭のこと呼び出しといて、ずーっとあんな高慢な態度取られたら誰でもそう思うて！」

「もう一回言ってみなさいよ、失礼な男ね！ 大体初対面の人間にそんなこと言われる筋合いないわ！」

「やから、そういう態度が高慢や言うてんねん！ こんな副社長に見下ろされてるかと思うと、やってられへんなあ…まるで封建制や」

「ちよつと…ふざけたこと言ってる、人事に連絡してあんたの内定取り消させるわよ！？」

「ほら来た、職権濫用もいいとこやで。天下の東興物産の副社長やから、さぞかし知的で冷静なお人やと思つてたのに…」

いつの間にやら派手な言い合いを始めた二人をよそに、南は話を次に進めていこうとする。

「――要するに、お前の会社は、社長のお前がいないと機能しないってことだよな？ それは…困るんじゃないのか？」

背後から圭を取り囲むようにして立っている社員の三人がそろって頷いた。彼らのうち、アレックスは片言ながら日本語を話すが、ほかの二人は母国語でしか会話ができないようだった。見たところ、インド系と中国系の男たちだが、それぞれ圭とは別々の言語で話していた。

「まずまともに日本語が使える人間が少ないのが問題だな。俺がそいつらの言葉に合わせて喋るのがいけないんだろうが、教えてる時間もないし、そのための人材を招くような経費も惜しい」

「圭社長は英語も、フランスも中国語も話せますヨ。おかげで通訳いららないね」

アレックスが得意げに言うが、それでは圭なしで仕事が成立しないということになってしまふのだ。基本的に社長は会社に欠かせない存在であるのが当然だ。ただ、圭が自宅に戻らないとなると、事情はまた違う。

「社長、ほんとに戻らないですか？」

いささか不安そうに尋ねるアレックスに、圭は考え込むようにして黙り込んだ後、言った。

「そのことで、俺にひとつ提案があるんだが…」

圭が何やらアレックスに耳打ちをする。ほかの二人も耳を寄せ、それぞれに圭が伝える。

「いいですね、それ！ 賛成ですヨ！」

話を聞いたアレックスがガッツポーズをし、二人も拍手やアレックスとのハイタッチで嬉しそうにしている。南や真琴たちにとっては何の話かまったく理解できないが、何らか問題が解決したのは見て取れた。

圭はペンと紙を借りると、そこに英語で何かを書き取り、アレックスに手渡した。

「お前は帰ってこのことをみんなに伝えてくれ。必要なものと、業者の連絡先は書いてある。何かあったらすぐ俺に連絡しろ」

「連絡って…社長、ケータイ持ってないでしょ。事務所で見つけてビックリ。ホラ」

アレックスが胸ポケットから携帯を取り出し、圭に差し出した。家出時に置き去りにしてきた圭にとっては、およそ一ヶ月ぶりの自分の携帯との再会になるのだろう。しばし睨めっこをして、すぐに顔をしかめてテーブルの上に放り出した。

「…わざわざありがとう。じゃあ早急に手配してくれ。くれぐれも内密にな」

圭の指示に社員三人は黙って頷き、真琴たち下宿人に「お邪魔しました」と片言で挨拶をし、帰っていった。

「何の話をしてたのよ？」

土屋との言い合いに蹴りをつけたらしい雪が、立ち上がって尋ねた。

「いや、ちょっとね。それより姉さんはいつまでもここにいていいのか？」

「いいわけではないですよ。もう戻らないと…会社に仕事を残してきてるのよ。——とにかく、一度家に帰ってきなさい。母さんだって心配してるんだから」

雪の言葉に、圭は黙って小さく頷いた。

「それじゃ、また。失礼しました」

雪が会釈して立ち去ろうとしたところで、

「見送ります。だいぶ夜も遅いですから」

と、南が席を立った。

「おっ、南さん紳士やねえ。心配せえへんでも大丈夫やて」

土屋が口を挟むと、南は穏やかに言う。

「最近は何騒だしな。念のためだよ、念のため。…それに、ちょっと個人的に話があるんだ」

南と雪が連れ出って部屋を出ていくと、残った面々は顔を見合わせた。

「…南さん、どうしたん？」

土屋が神妙な顔つきで言った。安藤も目をしばたたかせている。

「南さんって、女性関係には堅実な人だと思ったけど…」

「いやいや、相手はあの女やぞ？ そら美人やとしても、南さんのタイプはもっと清楚系のはずや」

よく今日出会ったばかりの女性を、しかも弟の前で『あの女』呼ばわりできるものである。初対面であれだけの言い合いができる土屋の、人見知りしない、開けっ広げな性格も尊敬に値するかもしれない。圭は苦笑を浮かべながらも、面白そうにしていた。

「——そんで？ 圭はこれからどうするん？」

土屋が不意に話題を真剣なものに切り替えた。真琴にも気になることだったので、わずかに身を乗り出した。

「家には戻らないんですか…？」

「いや、近いうちに一回帰るよ。会社のこともあるし」

「永澤さんがいないと、仕事が進まないみたいですよんね」

「そうだな…これから少し慌ただしくなるから、できればみんなにも協力してほしい」

「それやったら遠慮なく言ってや。俺らにできることやったら、何でも協力するで」

土屋が言い、真琴も安藤も揃って頷いた。圭は「助かるよ」と微笑んだ。

——この時、軽々しく協力するなんて口にしてしまったのが、そ

もその間違いだったのだ。『協力する』方法にも、色々あるだろう、と。真琴を初め、日和荘の住人はしばらく後悔することになる。

翌朝。真琴は部屋の外からの騒音で目を覚ました。何かを運び込む人の足音や、トラックだろうか大型車のエンジン音も聞こえ、人の話し声で何やらざわついていた。

時計を見れば、朝の七時。早朝というほどではないが、まだ寝ていたい時間だ。パジャマ姿のままだったが、そつと窓のカーテンを開けてみた。

「何よ、これ…」

大型トラックが二台に、軽トラック三台が下宿の前に停車しており、作業員らしき人々が荷物を積み降ろして運び込んでいる。ただ事ではない事態に、真琴が部屋の外に出ると、いかにも寝起きの土屋が隣のドアから顔を出し、斜め向かいのドアからは、ネクタイを締めながら南が現れた。

「…何事やっちゅーねん」

不機嫌極まりない様子で、土屋が言う。

「引越があるって話は聞いてないよな」

南は首を傾げて、一階に降りる階段の踊り場から身を乗り出した。真琴も横に並ぶと、見覚えのある姿が目に入った。

「——あの人！ 昨日ここに来たアレックスって人じゃないですか

？ 永澤さんの会社の社員だっていう…」

真琴が指差す先には、強烈な印象を残した長身の黒人男性が作業員に何やら指示を出しており、おそらく三人ともに訪れた嫌な予感に、思わず顔を見合わせた。圭の部屋を振り返っても、彼が出てくる気配はなく、土屋がインターホンを鳴らしても返事はなかった。

「あいつ…何考えてんのや」

階段を降りていくと、アレックスがこちらに気づいて全開の笑顔で挨拶をしてきた。

「オハヨウございマス！ 昨日はドウモ、お騒がせでした」

「ああ、まあな。それより、一体君らは何をしてんのや？ 見たと

こ…というかどうか見ても建設工事が始まるとしか思えへんのやけど」

「今日は引っ越しですヨ」

「——あんまし聞きたないんやけど、誰の？」

「僕たちのですヨ！」

その言葉を聞いた途端、土屋は両手で顔を覆って「…はめられた」と呻いた。事態が把握しきれていない様子の南が尋ねる。

「君たちのつて…どうしてここに？ いつ大家さんと話を？」

「あ、この物件、僕たちが買い取ったんですヨ！」

その瞬間空気が固まったのは、言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9257c/>

---

オーシャンブルー

2010年10月12日18時23分発行